

## 唐木清志著『子どもの社会参加と社会科教育 —日本型サービス・ラーニングの構想—』

桐谷正信\*

本書は、筆者の『「社会参加」の視点を社会科でどう生かすか』という問題関心のもと、15年にわたって理論的・実践的に追求してきた研究の成果である。最近になって注目を集め始めた「社会参加」に逸早く注目し、その学習理論をアメリカのコミュニティ・アクトやサービス・ラーニングに求め、その上で、アメリカのコピーではない日本型サービス・ラーニングを構築しようとした著者の研究は鋭くも堅実である。改正教育基本法や新学習指導要領にも登場し（「社会参画」という言葉が使用されている）、今後授業の中で展開されていくことが期待されている「社会参加」をどのように計画し、地域・社会のリソースや人々と交流し、子どもに意味のある学習を展開していけばよいか悩んでいる教師は当然多数いるであろう。総合的な学習の時間や特別活動ではなく、社会科の授業の中にこそ「社会参加」を組み込みたいと考えている教師も多数いるであろう。本書は、授業時間数とあるべき社会科授業の間で悩んでいる教師に、「勇気を持って一步を踏み出」すための手だてを示し、背中を押してくれる書である。

本書の構成は以下の通りである。

まえがき

第Ⅰ章 教育改革のキーワードとして

第Ⅱ章 社会科の本質としての社会参加

第Ⅲ章 日本型サービス・ラーニングの構想

第Ⅳ章 子どもの社会参加をうながす社会科授業の実践事例

第Ⅴ章 社会科教育の課題と可能性

あとがき

各章の概要をまとめると以下のようなだろう。

第Ⅰ章では、昨今の教育改革を「社会参加」をキーワードに読み解き、これからの教育における「社会参加」の重要性を明らかにしている。改正教育基本法・PISA調査・経済産業省などにおける「社会参加」の位置づけを分析している。また、中央教育審議会答申で提案された新たな「学力」キーワードの一つである「活用」に注目し、学習で身に付けた「学力」を、現実社会の文脈で実際に「活用」していく新たな「活用」のあり方を提起している。

第Ⅱ章では、社会科における「社会参加」が、目標としても方法としても中核に位置づけることを明らかにしている。その上で、「社会参加」に関連した授業を①「ガイドブックやマップをつくる」活動、②「まちづくりを提案する」活動、③「自分たちでできることを考え、行動する」活動の三つに分類し、現在使用されている小学校3年生～中学校3年生までの社会科教科書を分析している。その結果、教科書においてかなり多くの「社会参加」に関する記述がなされていることがわかる。

第Ⅲ章では、アメリカで注目されている「サービス・ラーニング」の理論と方法に学び、日本における「社会参加」に関連した社会科授業の理論的枠組みを構築している。その中で、日本型サービス・ラーニングの必要条件として、(1)地域社会の課題を教材化すること、(2)プロジェクト型の学習を組織すること、(3)振り返りを重視すること、(4)学問的な知識・技能を習得、活用する場面を設定すること、(5)地域住民との協働を重視することの5点を挙げている。この5点の必要条件に依拠し、著者自身が勤務する筑

\*埼玉大学

波大学で大学生に対して、大学周辺の「交通事故ハザードマップ」づくりの単元開発を行い、実践している。

第IV章では、「社会参加」に関する四つの社会科授業実践を取り上げ、前述の五つの必要条件に基づいて分析している。取り上げられた実践は、小学校3年生のゴミに関する単元、小学校6年生の政治に関する単元、中学校3年生の地方自治に関する単元、中学校3年生選択「社会」の地方自治に関する単元である。いずれの実践も、内容的には決して新しいものではない。オーソドックスな内容を、「社会参加」という方法によって、直接的に地域社会と「協働」した実践を展開している。まさに、「勇気を持って一歩を踏み出」した実践である。

第V章では、まとめとして、日本型サービス・ラーニングを社会科授業に導入する前に解決しておく課題3点と、導入したことによるよい影響、すなわち可能性3点について論じている。

著者は、社会参加力が社会科の目標である「公民的資質」に含まれており、それゆえに社会参加力の育成の重要性を説く。そして、複数ある社会参加力育成の方法の中で著者がとった方法は、「社会参加という方法を用いて、社会科参加力を育成する」という「きわめてシンプルな」方法である。これは、「公民的資質」の中核に社会参加力を位置づけ、直接的に、活動し参加する社会の担い手（＝活動的市民）の育成の試みである。このような著者の思考が最も端的に表されているのが、「まえがき」のこの文章であろう。「自らが社会の担い手であるという自覚は、社会参加を通して多様な人々と交流する中でこそ芽生えてくる。また、追求すべき課題が教科書の中にあるのではなく、現実社会の中こそあるという認識は、地域社会の生々しい課題と実際に格闘する中でこそ生まれてくるものである。」

注目したいのは、著書が「社会参加」を学習領域としてではなく、学習方法として捉え、学習

方法ゆえの応用可能性や柔軟性を説いていることである。著者は、国際理解教育・情報教育・環境教育などのさまざまな「〇〇教育」を、「社会参加」という「申」で貫き、「構造化」を図る必要性を提起している。このことは、以下の二つの可能性を持つ。一つは、学習方法としての「社会参加」は、さまざまな「〇〇教育」と結びつき、新たな「〇〇教育」の学習の展開を促しうる可能性を持っているということである。もう一つは、さまざまな「〇〇教育」を「社会参加」で貫くことで、拡大傾向にある教育内容・領域を再編する可能性を持っているということである。学習改革論としてだけでなく、カリキュラム改革論としての視点も含んでいるのである。

本書は、このように「社会参加」の持つ教育力と魅力をふんだんに提供している。しかし一方で、多くの教師にとって気になるのは、「社会参加」学習においてどのように質の高い社会認識を担保するのか、という点であろう。著者も、「社会認識は社会参加という具体的な経験を通してさらに高められる」ことや、日本型サービス・ラーニングの五必要条件の一つに「学問的な知識・技能を習得、活用する場面を設定すること」を挙げるなどして、社会認識の重要性や関連性を指摘している。しかし、授業開発や実践を展開する中で、どのように質の高い社会認識を保証すればよいかについては、詳述されていない。この点が明らかになることで、「勇気をもって一歩を踏み出し」た教師は、「自信を持って二歩目を踏み出せる」のではないだろうか。その意味で、刊行されたばかりの本書であるが、早くも続編が待ち遠しい。

著者の「社会参加」型社会科授業論の根底にあるのは、「『未来を創る子どもたち』の可能性」を信じることである。本書を手に取り、「子どもたちの可能性」のために「勇気をもって一歩を踏み出し」す社会科教師が一人でも多くなることを期待したい。